

鍍金長覆輪太刀

日本風俗史学会 齋藤慎一
青梅市文化財保護審議会委員

〔連載〕武蔵御嶽神社宝物シリーズ12

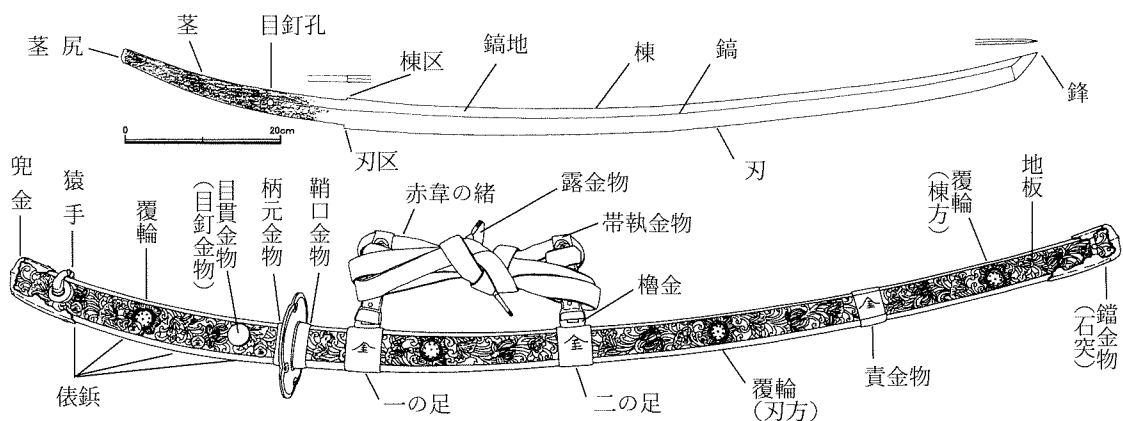
と きんながふくりんのたち

鍍金・鍍銀で飾った太刀装
は全長127cm、柄33.5cm、鞘94.3cm。
柄の幅は元近くで4.95cm、厚さ
1.55cm。鞘は、鞘口金物下で幅
4.86cm、厚さ1.63cm、鍍金の手前
で幅3.84cm、厚さ1.34cmと幅広で
肉取薄い鎌倉時代の平鞘である。
大振りで大太刀に属する。
刀身共で重量3.95kg、腰に佩く
実用品でなく、神宝用である
う。柄の四個の円板の依銀、
目貫金物、一の足金物・二の
足金物、帯取の円板等に線刻
した「金」の字は、金御嶽の
意といわれるので、鎌倉時代
のある時に金峰金剛蔵王権現
へ奉納のため改装した部分と
も考えられる。明治三四年
(一九〇二)七月一日に調
査した川崎千虎は飾太刀、大

正一四年刊行の府報告書も奉
納用、明治二二年の当社の目
録も飾太刀とする。早くから
注目された太刀で、明治三二
年八月一日、厳島神社の武具
と同時に国宝に指定された。
ただし鐔と二枚の大切羽は
昭和期の後補。古い鐔の実測
図は前記報告書に収める。当
初のままの刀身は全長115cm余
刃部は87.6cm、反り4.2cm。茎29
cm、生の目釘孔は低く刃区か
ら10cmの距離にある。茎反り
強く、茎尻は刃区から9cm反
上る。庵棟、鎬造で鎬地もあ
り、鉾鋒で、大鋒に近い。重
厚く、平肉がつく。踏張も強
く、鎌倉中期を下らない姿で
ある。当初の鉄製銀磨のつっ
かけ鉋を残すのも貴重である。

この鉋を掛けると刃部分の長
さは90.6cm程で、鞘の余り3cm
程度となる。う。
鎌倉中期の刀身と共に残る
鍍金銀製の太刀の刀装とし
て現存最古例ではあるまいか。
殊に地板全面を埋めた線刻・
蹴彫の魚子地蓮華唐草文は華
麗で、中世武具に託した祈り
の発想や優れた装飾志向を感
じさせる。
柄の地板の文様は、蓮座様
式の木瓜形の蓮実八葉の蓮
花を中心に据え、左右対称に、
蓮葉(荷葉)、半開敷の蓮花、
蓮葉、蔓先の構図とし、空隙
を蔓先の曲線と魚子で埋める。
華麗な運動感と宗教的雰囲気
がある。当時この山の主補だっ
た蔵王権現も二つの蓮座を踏
む姿である。鞘の地板はこの
構図を三度繰り返す。なお、
蓮葉の葉脈は一部に羽毛文を
刻む。羽毛文は春日大社の梅
枝金物赤糸威鎧の鍬形、御嶽
の懸仏にも刻まれる鎌倉中期

の意匠として注目される。柄
は、地板の棟・刃方に鍍銀の
覆輪板をあて、厚い地金を刀
法鮮かに彫り刻んだ鍍銀の
兜金、鍍銀の柄元金物を掛け
て止める。兜金は柄頭に鎬、
また棟・刃方に、鎬状の角を
つける。刃方は花先の山が二
つあって、棟方の4.6cmに対し
9.4cmと長い。この型式の兜金
は、鎌倉期の狐ヶ崎の太刀
(国宝)や猿投神社の黒漆太
刀(重文)にあるが、御嶽の
兜金の方が進んだ形であろう。
修理前まで棟方に回っていた
猿手は鍍銀で、鴈目と円座も
鍍銀、小刻座は鍍金に見える。
佩表の四つの依銀は柄元から
二つ目が、佩裏は柄元と四つ
目が新補、目貫金物は表が昭
和、裏が明治の新補。
鞘も同じ鍍金銀彩色で、鍍
金の地板を覆輪と要所の鍍銀
金具で効果的に対比した太刀
である。金銀対比は平安朝貴
族の好趣が、武具に投影した



鍍金長覆輪太刀の刀身と刀装 (刀装は旧状の写真による書起し) 作図 伊藤博司氏

鎌倉時代の一特色で、南
北朝時代にもつづく。御
嶽の赤糸威の兜の鍍金の
葵葉や篠垂の鍍銀の星、
紫裾濃の鍍銀の覆輪や鴈
目の玉縁・菊座、懸仏の
鍍銀の鏡面に鍍金の蔵王
権現像はこの例である。

鞘口から観察するかぎ
り鞘に木地がない。不審
である。地板のみで鞘
(鯉)口金物、一・二の
足金物、貴金物、鍍金物
をかける。鍍金物は兜金
と同じ形で、棟方は5.4cm
刃方は9.7cmと長く、棟と
刃の花先をつないだ薄い
帯金に釘を打ち、留める。
しかし帯金の輪郭は粗略
で、もとは蓮華文などの
据文があつてその下に隠
れていた部分と推定され
る。棟で鍍付けした貴金
物の切放のままの帯金と
同じ簡略な二つの足金物
には、櫓金につくはずの

笠金もない。金工手法も兜金
や鍍金物とは異質である。帯
執も異様で、櫓金に山銅の帯
金を通し、緒に折り平めて、
上部を緒にした二枚の鍍金板
で前後を包み、その上から釘
で留め、金の字を刻んだ円板
二つを打ち、円板の間を横に
帯金を巻き、上部に緒の隙間
をつくる(この鍍金板等は大部分
新補)。現在、新補の露
金物付き赤草の緒が通るが、
足掻もなく、縁が開放しの金
属の緒だから、実用にはなり
得ない。七ツ金や兵具鉤の帯
執が、足掻のない太鼓革の帯
執(初出例は「狐ヶ崎の太刀」)
に変わる過渡様式とも考えられ
るが、神宝用の形式であろう。
一方、帯金の足金物や貴金物
の例は御嶽の太刀に遅れる鎌
倉時代の都々古別神社蔵長覆
輪太刀(重文)に例がある。

御嶽の太刀の神宝様式への改
作は、この頃と思われる。
この太刀は、江戸後期に徳
川家康奉納とされたが、以前
は隠岐院・奥院の御太刀と称
した。万治二年(一六五九)
の「祭礼役儀帳」に「御太刀
役人：二番隠岐院」とみえる。
また、享保十九年(一七三四)
に神社奉行に提出した「武州
御嶽宝物覚」に「奥院御太刀
三尺壹寸五分右寸尺八鞘上二而取
申候しんちう之鞘二而古来より不
拔之太刀ト申来候間身寸尺知レ不
申候」と御太刀と敬称し、拔
く事を許されない太刀と申し
立てている。俗人の所用でな
く神の太刀として扱われて来
た存在であった。こういう神
宝としての伝承がこの太刀を
鎌倉時代の姿のままに現代に
残す結果となった。御嶽の神
への畏敬と奉仕が守り伝えて
きた長い歴史の重さも、この
太刀にあるといえよう。
鍍金長覆輪太刀の計測調査には、
前青梅郷土博物館学芸員の伊藤博
司氏と北村和寛氏、及び同学の友人
で甲冑師の寺本靖氏の協力を得た。